二〇二六年度　第一回

国語入試問題

帝京高等学校

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
※特に指示がない限り、句読点も一字に数えなさい。

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

先日、建築家の※安藤忠雄さんと対談した。安藤さんはご存知(ア)の方も多いと思うが、①極めて創造的な建築家で、国際的に高い評価を受けておられる。

何しろ独学で建築学をマスターした人だけあって、建築界の常識を破るような設計をして、人々をあっと驚かせ、さすがだなあ、と思わせるところがある。日本中の人が一流大学を出て、一流企業に勤めるのが最高などと思っているときに、まさに②わが道をゆく生き方をして成功された人だけに、前から一度お会いしたいと思っていた。

ところで、対談は期待に違(たが)わず面白いことになったが、そのなかで印象に残ったことのひとつは、安藤さんが③「常識のない人は駄目ですね」と言われたことである。安藤さんのような創造的な人がなぜ、と不思議にも思えるが、対談を続けていてすぐ安藤さんのシンイ(イ)がわかってきた。

最近は創造性ということが大切にされてきたので、それを間違って、まるで非常識なことが独創的であると思っている人がある。そんな人はただ周囲が迷惑するだけで何の取りえもない。それよりも、常識をちゃんと身につけて生きていて、なおかつそれを超えて何かが出てきてこそ、ほんとうに独創的であり得る、というのである。

私はこれを聞いて、なるほどとカンシン(ウ)したが、聴衆もそう感じた人が多かったようで、後で安藤さんをカコ(エ)んで座談会をしたときに、早速そのことが話題になった。

このことはほんとうに大切だということになったときに、安藤さんが常識というものは、知識として知っている、というのではなく「 A 」になっていなくては駄目で、そのためには幼い子どものときからの教育が大切だと言われた。

これにもカンシン(ウ)していると、若い母親の方が「それでも常識を教える、ということに、このごろの親はとまどいがあったり、自信がもてなかったりするのではないか」と言われる。

そもそも何が常識かわからない、今は常識と思っていることでも、すぐに常識でなくなってしまうことが多いのでは

ないか。世のなかがどんどん変わってゆくのに、親が常識と思っていることを教えこむと、④かえって子どもは困ってしまうのではないか、と言うのである。

これは実に重要なポイントである。私もしばらく考えたが、およそ次のようなことを申しあげた。

たとえば、私が子どものころは、大阪から東京まで「超特急」で八時間かかるのが常識であった。ところが今はまったく変わってしまった。あるいは、紙を大切にしなくてはならないので、裏の白い紙は捨てずに置いておくのは常識であることを教えられてきた。これも今では㋐ズイブン変わってしまった。

私が両親から教えられた多くの常識は今は通用しない。そのために私は両親を馬鹿にしたり、恨んだりしているだろうか。そんなことは決してない。

常識はあくまで常識で、「絶対的真理」ではないし、「神の命令」でもない。常識を身につけて生きているということは、常識に縛られているのとは違う。常識に固く縛られてしまったら、その常識が変化すると大いに困ることだろうし、B はなくなってしまうだろう。

しかし、常識をあくまで常識として身につけている人は、それをひとつの守りとして、自分も他人も不必要に傷つけることなく生きながら、⑤新しい変化に対応してゆけるであろう。

このように考えると、今の親も自分の常識を子に伝えることに迷う必要はない。自信をもって伝えてゆけばいいのである。

むしろ、問題は、常識は押しつけたり教えこんだりできるものではなく、体から体にじわじわと伝わってゆくようなものだから、それに必要なだけの生活の共有時間が少なすぎることではないだろうか。

と言っても、昔の親子にしても長時間を共に暮らしていたわけではない。要するに、親が自分の常識を伝えることに不安を感じたり、自信をなくしたりせずに、⑥子どもと接している時間がどのくらいあるか、ということであろう。

このことは親の常識どおりに、そのまま生きよということではない。常識の内容は変わるにしろ、常識を身につけた

生き方そのものを伝えるのだ。となががと考えて、今の親たちも自信をもって、と言いたいのだが、⑦そんなのは「常識ですよ」といわれるかもしれない。

（河合隼雄『河合隼雄の幸福論』ＰＨＰ文庫）

※　安藤忠雄……高校卒業後、大学には進学せず、世界を旅行したり、様々な職業を経て建築士の資格を取得。コンクリートを多用したデザインが有名。

問１　傍線部①とありますが、このことを言いかえている別の表現を、本文中から九文字で抜き出しなさい。

問２　傍線部②とありますが、筆者は「安藤氏」がどのような生き方をしていると述べていますか。該当する部分を本文中から十三文字で抜き出しなさい。

問3　傍線部③とありますが、このことがなぜ筆者の印象に残っているのですか。理由としてふさわしい物を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　対談内容としてはあまりにも発言が常識的すぎたから
イ　一流大学の出身者が他人の悪口を言うなど予想外だったから
ウ　国際的に高い評価を得ている人の発言として不適切だったから
エ　創造的な建築家が対極とも言える「常識」の必要性を説いたから
オ　一流の建築家は常に世間的には非常識な行動をとるから

問4　傍線部④について、

a　このように考える理由としてふさわしい物を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　親が子どもに厳しくあたると子どもの成長に悪影響が出るから
イ　親の考える常識が子どもにも当てはまるとは限らないから
ウ　子どもが非常識にならないためには大人が常識を持たないといけないから
エ　子ども同士の世界の常識は大人の社会では通用しないから
オ　親が常識にとらわれ過ぎると子どもが勝手な行動に出るから

b　母親のこのような疑問に対して、筆者は子どもに対してどのように接するべきだと述べていますか。該当する一文を本文より抜き出し、そのはじめとおわりの五文字(句読点を含む)を答えなさい。

問5　傍線部⑤とありますが、これはどのような事を指していますか。説明しなさい。

問6　傍線部⑥とありますが、筆者はこの事と同じ内容を別の表現を用いて述べています。該当する部分を本文中から七文字で抜き出しなさい。

問7　傍線部⑦とありますが、筆者はなぜこのように考えたのですか。説明としてふさわしい物を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　筆者の考えは子どもの親たちが既に常識として知っていることかもしれないから
イ　親たちにとって子どもに常識を伝える際には迷う事がたくさんあるから
ウ　筆者と安藤氏の考える常識と現代の親たちの常識はかけ離れたものだから
エ　子どもが非常識な行動をとることは親たちにとっては当たり前の事であるから
オ　常識とは絶対的真理や神の命令のように不変のものだから

問8　［A］に入れるのにふさわしい表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　独創的なもの
イ　説明できるもの
ウ　自分が納得できるもの
エ　人を驚かせるもの
オ　身についたもの

問9　B　に入れるのにふさわしい語句を本文中から抜き出し、答えなさい。

問10　波線部㋐～㋓について、漢字は読み方をひらがなに、カタカナは漢字に各々直しなさい。

問11　筆者は「常識」とはどのような物だと考えていますか。該当する部分を本文中から二十一文字で抜き出しなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、本文の一部を省略した）

日本人の会話のなかで、いちばんよく使われるのは「やっぱり」、あるいは「やはり」という言葉ではあるまいか。私はべつに調査をして統計をとったわけではないから断言はできないが、テレビやラジオなどで耳にする会話のなかでも、この言葉は※頻出する。ことに何かについての意見を求められた場合にその頻出度は、いっそう高まるようだ。

たとえば、新しい内閣ができて、それについての意見や感想をきかれるようなとき、あるいは世間の耳目を集めるような事件が起こった際、テレビやラジオのマイクを差し出されると、ほとんどの人が「やっぱり、こうじゃないですか」「それはやはり、こうだと思います」と自分の意見や感想の前に、かならず「やはり」「やっぱり」という言葉を、あたかも接頭辞のようにつける。いったい、「やはり」とか「やっぱり」という言葉は何を意味しているのであろうか。

――中　略――

そう。日本人の特質は、つねに何かを予想し、予期しているということなのである。それはある種の運命観といってもいい。日本人はいつもその予感のなかで生きているのだ。

このことは、おそらく日本という風土、その自然環境と無関係ではあるまい。日本では――場所によって多少は異なるが――一年のうちで四季が三か月ずつに均等にa ハイブンされており、風月はまことに規則正しく循環している。まさしく、「※暑さ寒さも彼岸まで」という※あんばいである。このような風土は、世界広しといえども、きわめて例外に属する。他の地域では四季にはたいてい長短があり、雨期と乾期はあっても四季など持たぬ国さえ多いのだ。

四季が均等に分かたれ、歳月がきわめて規則的にめぐる風土では、何もかもがはっきりと見通せる。二月の末ごろに強い風が吹くと、天気相談所に「この風は春一番か」という問い合わせが殺到するそうだが、それは、もうそろそろ「春一番」が吹いてもよさそうだと、多くの人がそれを予想し、予期しているからなのである。そして、bキショウチョウが「本

日吹いた風は春一番です」というと、日本人は「やっぱりそうか」とうなずいて安心し、新聞も大きな見出しでそれを報じる。同じことは「梅雨明け宣言」についてもいえよう。梅雨が明けたことをわざわざ宣言するというのは、日本人がみなそれを期待しているからなのだ。だからその期待にこたえなければならないのである。①そのような宣言によって日本人は「やっぱり」といって安心する。これが「やっぱり」の風土的背景といってよかろう。

しかし、「やっぱり」にはもうひとつ、社会的な背景がある。それは日本の社会が世界でも珍しいほどの②同質社会であることだ。地球上の多くの国々は民族と国民とが必ずしも重なっていない。※ソビエトや中国やインドやアメリカ合衆国などの大きな国はもとより、シンガポールのような小さな国でも多くの民族が集まってひとつの国をつくっている。民族が異なるということは、言語や宗教や習慣がちがうことであり、したがってそのような社会では人間関係がきわめて複雑である。

（　A　）日本の場合は民族と国民とがほぼひとつになっており、この意味でたいへん気楽な社会だといえる。他国に見られるような民族的な※軋轢（あつれき）はこの国にはない。日本的な合意（コンセンサス）というものが、他の国の人びとから奇異な目をもって見られているようだが、そのような暗黙の合意が成り立つというのも、この国が同質社会であるゆえだ。

しかし、同質の社会というものは、だからといって、必ずしも手放しで気楽な社会というわけではない。同質社会には同質社会なりの圧力があるのだ。その圧力とは、おなじでなければならぬ、ということである。だからこそ日本はそのローラーによって、他のどんな国よりも――平等を理想とする社会主義国よりも、[c]ショトクの格差が小さく、国民の大多数がみな「中流」をもって任じているのだ。九〇％以上の人がみなおなじ「中流」階級に属しているなどと思っている国は、ほかにない。

（　B　）、私はこれに[d]イゾンがあるわけではない。貧富の差がなく、国民のショトクが平等に近いということは大いに[e]ケッコウなことである。だが、人それぞれの意見までがおなじ、となると話はべつになる。いくら同質社会といっても、各人の意見までがおなじでなければならぬという道理はないからだ。ところが、③同質社会は、とかく考え方までがおなじでなければならぬように思いこませてしまうのである。日本人が人いちばい世間体（せけんてい）を気にするのは、そのような

無言の圧力のせいである。世間体を気にするというのは、自分が人並み外れていはしないかどうか、という臆病なまでの配慮といっていい。

とうぜん、何かについての自分の意見を発表する際には、そうした配慮が働く。日本という同質社会では、おなじことがいいことなのであり、人並外れた意見というのは④白い目で見られるからである。べつに危害を加えられるわけではないが、仲間外れにされてしまうのだ。日本人にとっては、仲間外れほどつらい仕打ちはない。なぜなら、仲間外れになるということは、日本人でなくなるような気にさせられることだからである。「⑤バスに乗りおくれるな」とか、「梯子を外される」という表現は、そうした仕打ちに対する恐怖を正直に語っている。

「やっぱり」とか「やはり」というこの慣用語は、じつは、その恐怖を無意識のうちにいいあらわしているのである。日本人が何かについての意見をきかれたときに、やたらに「やっぱり」や「やはり」を連発するのは、「私が思っていたとおり」という予言者的な、つまり、自信に満ちあふれた立場の表明ではなく、「あなたをはじめ、みんながそう思っているように」「世間一般の人たちが考えているように」自分もそう思う、という意味の「やっぱり」なのだ。（　C　）、マイクを差し出されて意見をただされたときに、ほとんどの人が「やっぱり」をつい連発してしまうのである。それは無意識のうちに世間におうかがいを立て、自分の意見がけっして人並外れた考えではなく、世間のみなさんとおなじように自分もそう考えます、ということを弁明する強調詞だといってもいい。

だとすれば、数多くの日本語のなかで、「やっぱり」、あるいは「やはり」という慣用語こそ、何より⑥日本的な性格を正直に告白している言葉といえないであろうか。

私はこの言葉こそ、日本の主語だと思う。「自分はこう思う」というときの主語は、むろん、その意見を発表する「自分」である。だが、「やっぱり」とか「やはり」という間投詞をさしはさむときには、「自分」という主語のほかにもうひとつ、「日本」という、あるいは「世間」という大主語が無意識のうちに予想され、前提されているのだ。

（森本哲郎『日本語　表と裏』新潮文庫）

※　頻出……同じことが何度もあらわれること。

※　暑さ寒さも彼岸まで……春・秋の彼岸を過ぎると、寒さや暑さも衰えて、しのぎやすい気候になるということ。

※　あんばい……ほどあい・つごう。

※　ソビエト……一九二二年から一九九一年までユーラシア大陸北部に存在した社会主義国家で、正式な国家名はソビエト社会主義共和国連邦。一九九一年ロシアとウクライナを中心とする共和国が独立を宣言した。

※　軋轢……不和・反目。

問1　本文中の傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直しなさい。

ａ　ハイブン　　ｂ　キショウチョウ　　ｃ　ショトク　　ｄ　イゾン　　ｅ　ケッコウ

問2　空欄（　Ａ　）～（　Ｃ　）に入る最も適当な言葉を次の中より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　そして　　イ　もっとも　　ウ　だから　　エ　なぜならば
オ　むろん　　カ　ところが　　キ　ともすれば

問3　傍線部①にあるように日本人が「やっぱり」と考える根拠を本文中より五十字以内で抜き出し、はじめとおわりの五文字で答えなさい。（句読点も一字とする）

問4　傍線部②にある日本の社会が「同質社会」であることの長所はどういう点か。具体的に説明している箇所の言葉を使って答えなさい。

問5　傍線部③にあるように「日本人が人いちばい世間体を気にする」と筆者が考える根本の概念は何か。【〇〇〇〇ということ】のかたちで十五字以内で答えなさい。

問6　傍線部④・⑤の意味をそれぞれ選択肢より選び、記号で答えなさい。

④　白い目で見られる

ア　全く無視されること
イ　尊敬のまなざしでみられること
ウ　自責の念で後悔させられること
エ　悪意のこもった冷淡な目でみられること

⑤　バスに乗りおくれる

ア　バスは時刻表通りには来ないということ
イ　乗りたいバスに遅れたら、遅刻するから気を付けろということ
ウ　時勢や時流から取り残されること
エ　一期一会の出会いを大切にせよということ

問7　筆者は「やっぱり」、あるいは「やはり」を傍線部⑥にあるように「日本的な性格」と言っているが、その「日本的な性格」を具体的に述べている箇所を本文中より八〇字以内で抜き出し、はじめとおわりの五文字で答えなさい。（句読点も一字とする）

問8　次のア～オのうち本文の内容に合致するものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア　日本人が「やっぱり」とか「やはり」という言葉を使うのは、歳月がきわめて規則的にめぐる風土が関係しており、何もかも見通すことができるからである

イ　「やっぱり」とか「やはり」という言葉を接頭辞につける日本人は、自分に自信がないので他の国々の人たちへの言い訳として使用している

ウ　日本人が使用する「やっぱり」とか「やはり」という言葉は、それぞれの個人が信仰する宗教が背景となっており、個々の尊厳が認められている日本特有のものである

エ　日本人の大多数が自分は「中流」階級に属していると思っており、貧富の差がないことで「やはり」とか「やっぱり」という言葉が出ることがもっとも良いとされている

オ　日本人にとっての恐怖は「仲間外れ」になることであり、「やっぱり」とか「やはり」という言葉で自分の意見がみんなと一緒であることを他者に訴えている

二〇二六年度　入学試験　第一回　**国語**　解答用紙　帝京高等学校

受験番号　　氏名　　得点

【一】

問1

問2

問3

問4　a

b　　ふ

問5

問6

問7

問8

問9

問10　㋐ じ　㋑　㋒　㋓ で　㋔ ん

問11

（【二】の解答欄は裏面にあります）

【11】

問1

a	b	c	d	e

問2

A	B	C

問3

問4

問5

問6

④	⑤

問7

問8

二〇二六　年度　入学試験　第一回　国語　解答用紙　帝京高等学校

受験番号

氏名

得点

【二】

問1　建築界の常識を破る　④

問2　独学で建築学をマスター　した　④

問3　エ　④

問4　a　イ　④

b　常識の内容〉えるのだ。　④

問5　世の中の変化に伴い、常識と思っていたことが常識ではなくなること。　④

問6　生活の共有時間　④

問7　ア　④

問8　オ　④

問9　創造性　②

問10　㋐ごぞんじ　㋑真意　㋒感心　㋓囲んで　㋔随分　②×5

問11　体から体にじわじわと伝わってゆくようなもの　④

（【二】の解答欄は裏面にあります）

50

【二】

問1
a 配分
b 気象庁
c 所得
d 異存
e 結構
③×5

問2
A カ
B オ
C ウ
③×3

問3
四季が均等〜見通せる。
⑤

問4
日本的な合意（コンセンサス）が暗黙のうちに成り立つこと。
⑤

問5
おなじでなければならぬ、ということ
⑤

（別解）
自分が人並み外れていはしないか、ということ

問6
④エ
⑤ウ
②×2

問7
無意識のう〜る強調詞だ
③

問8
ア・オ
④